

## 主論文要旨

論文題目 内村鑑三のキリスト教思想

氏名 渡部 和隆

本研究は内村鑑三のキリスト教思想における神認識から救済論までを神学的認識論の観点から分析するものである。一般に、近代以降、組織神学では経験という方法を避けて通ることができない。認識論的な方法論の問題が大きな比重を占めている。近代日本で活動した内村鑑三の場合も同様であり、キリスト教は「実験」によって理解できるという経験主義的なテーゼをしばしば主張する。内村においても、神学的な認識論の問題が考えられていたのである。さらに神認識に関しては、内村の場合、「仰瞻」という独特の用語が使われることにも注目しなくてはならない。内村はしばしば、イエスの十字架を仰ぎ瞻ることによって救われると主張する。内村においては、神を認識することがそのまま救済へとつながっていくのである。以上から、本研究では、内村のキリスト教思想を神学的認識論の観点から分析し、神認識から救済に至るまでの内村の論を明らかにすることを目指した。

内村は先行研究が多く、神認識に関する先行研究も内村の「実験」概念の研究や「仰瞻」概念の研究として存在している。本研究では、まず内村研究の状況を概観した後、神認識をめぐる先行研究としてジョン・ハウズ、ミシェル・ラフェイ、原島正、中沢洽樹の研究を分析した。その結果、先行研究では以下のようなことが解明されていると判明した。

- ①内村の神認識の問題には、内と外をめぐる二つの経路があり、両方とも十字架の事実を目指していること。
- ②外ではなく内の論理に関わる「実験」が、農学のような「事実」を収集するための方法でありつつ、もっぱら「内なる事実」「心霊上の事実」といった実存的問題に関わること。
- ③「実験」は「道徳的実験」であり、カントの実践理性批判との類比で考えられていること。
- ④内ではなく外の論理に関わる「仰瞻」が、罪意識を介して、自己の外に救いの根拠を求めらるものであること。
- ⑤「外なる十字架」を認識する媒介として、「天然」「歴史」があること。「実験」もまた両者に関わっていること。
- ⑥「十字架の事実」は「この世の聖化」と関わるので、「今」において「既に」と「未だ」という二つの副詞が緊張関係を念頭において論じなければならないこと。
- ⑦「仰瞻」概念を通して、神認識が義認と聖化とをつなぐ救済論的含意をもっていること。
- ⑧「仰瞻」が内においては「キリストとの合体」、外においては「全人類救済」「宇宙の完成」という射程をもっていること
- ⑨「仰瞻」には、「おぼろながら」という表現に表されるような途上性・未完性があること。

項目は大まかに整理すると、神認識を可能にする基礎の問題と神認識が救済という実質に

向かっていく過程の問題とに分類できる。前者に属するのは①②③④⑤⑥、後者に属するのは⑦⑧⑨である。前者はさらに、内村の神認識の基礎となる「実験」「天然」「歴史」の問題（＝②③⑤）、神認識の対象である「十字架の事実」を把握するのに必要な問題（＝①⑥）、後者は神認識が救済論に対して有する射程の問題（＝⑦⑧）と神認識の途上性・未完性（＝⑨）とに分けることができるだろう。すなわち、

- (1) 「天然」「歴史」「実験」を通しての神認識はいかにしてもたらされるのか
- (2) 「今」における「既に」「未だ」という時間構造をもつ「十字架の事実」はどのような思想が背後にあることによって可能となるのか。
- (3) 義認は「仰瞻」を介することでいかにして聖化や栄化とつながっていくのか。
- (4) 「仰瞻」のような神認識の途上性・未完性とはどのようなものなのか。

といった問いに答える必要が出てくる。本研究はこれらの四つの問いに答えることによって神認識から救済論までの解明を目指した。

では、どのような成果が出たのかを、各章ごとに述べよう。第一部では、(1)の問いに答えるため、内村の哲学的認識論の枠組みを分析した。第一章ではその問いに答えるため、内村の経験主義的な枠組みをイギリス経験論の哲学、特にヒュームの哲学と比較することを通して分析した。その結果、内村においてもヒュームにおいても、真偽をテストされるべき仮説を事前に設定されておらず、経験的事実性が重視されており、カントとは違って現象と物自体とが分離していないと考えられているため、経験的に自我に与えられる「事実」は人間が構築したものではなく、むしろ自我の外に確かに実在するものとされていたことを明らかにした。ただし、内村の場合、「実験」は信仰の基礎となるため、内村の「全有 whole being」による検証がなされている。内村の「実験」には、ヒュームの場合とは異なり、「詩的観念」のような余剰が含まれていた。

第二章では同じ問題を「形而上学」という別の切り口から分析した。その結果、内村には、経験を超えた形而上学的対象が実は人間の経験のうちにあらわれて人間によって経験されるという「形而上的経験」の考え方があったことが判明した。内村にとって、「形而上」の実在は人間が経験することが可能なものだったのである。このことは特に内村の sacrament 論を分析することでより明らかとなった。内村の想定する「形而上」の実在は sacrament という「表号」を介することで経験可能な存在になる。「天然」の世界のあらゆる被造物が「形而上」の実在の「表号」(Symbol) となって人間に経験される世界、それこそが「形而上的経験」であった。以上より、第一部では、被造物が「形而上」の実在の「表号」となることによって神やキリストが人間に経験されるという「形而上的経験」が可能となり、実在とのつながりを有した経験的事実として人間の自我に最初に与えられるということが内村の「実験」の認識論的基礎であると結論づけた。人間はこうして与えられた「形而上的経験」の「実験」を、実在とつながっている「事実」として収集するのである。

第二部では、内村の神学的認識論を分析した。第三章では、方法論的考察として、内村の聖書解釈テキストの分析方法を、彼の文学観や聖書観にまでさかのぼって分析した。その結果、内村が言語観や文学観においても、外部の实在との照応関係を問題としていたことを明らかにした。同じことが聖書に関しても言える。聖書はそれ自体では不完全な人間の言葉であるが、現存するキリストという外部の实在との照応関係を媒介することによって、神の言葉としての意味が明らかとなるのである。第三章では、そのような内村の聖書解釈テキストの分析方法として、聖句にまで範囲を限定する方法を提示した。内村は何よりも聖書の研究者・解釈者として大量の著作を遺した人物であり、その思想を解明するためにはまず彼の聖書解釈に注目すべきだからである。そして、内村が組織神学のテキストのように様々な聖句をコラージュして使っているという特徴に合わせ、聖句の解釈という方法を提示した。ある一つの聖句について、内村がどのような解釈をしているかを、時系列順に追っていくという手法である。この文献学的方法には、研究の精度を上げて内村の自由な発想を追跡し、内村のキリスト教思想の多くの側面を統一的に明らかにすることができるというメリットがあるが、分析対象となる聖句をいかにして設定するかという問題が生じることがデメリットである。以下、本研究はこの方法をできるだけ用いて分析を行った。

第四章では、(2)の問いについて、ヘブライ人への手紙一三章八節とヨハネ黙示録一章八節との解釈を通して考察した。内村においてヘブライ人への手紙一三章八節は第一に、時空を超越した神的存在者であるキリストが実は歴史的時間の内部において自己同一性を保持しつつ、人間に経験可能な实在として現われているのを「キリストの現象学」でもって直観するという「形而上的経験」を意味するものであった。この「形而上的経験」によって内村の言う「実験」は可能となる。その際、経験されるキリストは「度」の論理でもって現れるものであり、生きた人格であり、「永生」であった。この「形而上的経験」がヨハネ黙示録一章八節によって将来に延長され、さらに聖書の全体的統一性、すなわち終末論的観点から聖書を全体的に解釈する際の根拠を導き出した。その統一性の内実は神名の解釈において明確となった。聖書は神の啓示のグラデーションという「度」の論理でもって、啓示の強度という形で連結され、全体的統一性をもって解釈されうるものだとされたのである。かくして、「十字架の事実」は「形而上的経験」と啓示のグラデーションという「度」の論理が背後にあることによって認識可能にされていたのである。

第五章では、(3)の問いと(4)の問いとについて、マタイ福音書五章八節とコリント前書一三章一二節とヨハネ第一書三章二節の三つの聖句の解釈を通して分析した。まず、「仰瞻」という言葉が内村の中で深い救済論的含蓄をもつようになった過程を分析した。再臨運動直前期になると、再臨と「神の顔を見る」という主題とが加わった。「仰瞻」に「神の顔」というモチーフが加わり、「神の顔」を再臨の時に見ることによって、キリスト者は神に「肖」ることを得るので、キリスト者に道徳的な完全性、すなわち聖化や栄化がもたらされると考えられるようになったのである。これは同時に救済の完成であり、至福直観でもあった。現在の終末論と再臨とは、神の顔の明瞭度の違いとして区別されると

同時に連続しても考えられている。神の顔を見るという点では現在時も再臨時も同じであるが、神の顔の明瞭度に差異があり、現在時は朧でしかないが、再臨時には顔と顔とを合わせてはっきりと見ることになる。この明瞭度の違いにより、現在時から始まった救済は再臨時に完成するとされたのである。ここにも「度」の論理が見られた。こうして、義認は「神の顔」を「仰瞻」することを介して、「神の顔」の明瞭度の違いによって、聖化や栄化へとつながっていき、同じく神の顔の明瞭度の違いによって、神認識は現世における途上性や未完性をもつようになるのである。

最後に、第六章では、神認識の対象である神そのものを内村がどのように考えていたのかを論じるために内村鑑三における三位一体論を分析した。内村は社会的三位一体の考え方を展開した。それは「神は愛である」ことの徹底であり、内在的三位一体にせよ経綸的三位一体にせよ、神が人間と関わって救おうとする神であるという前提から導き出されている。三位一体論は贖罪や救済の上に根拠づけられている。その際、聖書の引用、ジョン・エドワーズの言及、人名の引用など、内村は Edgar の論文を参考にして論を組み立てていることが本論の分析で提示された。内村はアメリカの神学、特に長老派の神学の伝統のなかで思索を展開していることが明らかとなったのである。しかし、内村が付与したり削除したりした箇所を検討によって、内村が Edgar の論文をそのまま日本に持ち込んだわけではないことも提示された。内村は日本人に伝道するという自分の文脈を意識し、その文脈に合うように Edgar の議論を編集し、削除や付与を施している。内村は、神が愛であり人間の救い主であることを、アメリカのキリスト教の伝統から素材を得つつ、日本人に合うように編集して発表したのである。したがって、内村にとって、神認識の対象となる神は、三位一体の神で表現されるような愛の神だったのであり、愛でもって人間に働きかけ、人間を罪から救おうとする神だったのである。

終章では、結論として、「形而上的経験」と「度」の論理の二つを内村の神学的認識論の特徴として挙げた。まず「形而上的経験」については、内村が純粹理性よりも人間の実際のザラザラした経験の上に立ち、「詩的観念」や sacrament 論によって表されるような「形而上的経験」が人間の経験のうちに事実として存在していると主張していることを明らかにし、このような宗教経験や「形而上的経験」の経験的事実性の主張は、近代以降のキリスト教弁証論の一つとして考察に値する主張だと結論付けた。むろん、現存するキリストという外部の實在との照応関係の経験が万人に当てはまるものではない以上、内村の「形而上的経験」の考えから普遍妥当性を引き出すことはできない。しかし、人間の実際の経験には、理性によって合理的に構成されるものからはみ出る余剰部分があることも事実であり、内村はその余剰部分を外部の實在との照応関係が豊かに含まれる「形而上的経験」として経験し、キリスト教を弁証する際の根拠としたのである。

次に、「度」の論理については、この論理が啓示のグラデーションという形で内村の「形而上的経験」に影響を与えており、さらに神の顔の明瞭度の違いという形で救済論にも影響を与えていることを明らかにし、先行研究では伝統的でオーソドックスなキリスト教だ

とされてきた内村のキリスト教思想の根底にプロセス神学を思わせるような「度」の論理が潜んでいると結論付けた。結果だけみればオーソドックスという評価を下すしかない内村のキリスト教思想であるが、その信仰をどのように認識したのかという神学的認識論の切り口から見ると、そのオーソドックスな信仰が当たり前信じられるものではなく、「度」の論理のような興味深い論理が背後にあってはじめて可能となるということがわかるのである。

内村鑑三という人は人間のザラザラした経験の中で現世にて人間の救いを求めて実際に働く愛の神すなわち「活けるキリスト」を信じ、その神を認識することを切に望んだクリスチャンであった。「活けるキリスト」こそ、内村の「実験」や「形而上的経験」の対象であり、内村の自我が照応関係を求めた外部の実在であり、聖書の神の言葉としての意味を開示する神の霊であり、神的存在者でありながら歴史的時間の内部において生成する現象であり、「仰瞻」によって今ここで人間に救いを与えつつ将来においては完全な救済をもたらす存在であった。「活けるキリスト」に触れるためには「形而上的経験」や「度」の論理といったものが認識の基礎的な枠組みとして必要だったのである。こうして、内村のテキストを神学的認識論の観点から読むことは、当り前の背後にある当り前ではないものを浮き彫りにし、「活けるキリスト」を認識してキリスト者になることの意味を改めて私たちに問い直してくる。存在論的観点から結果だけ取り出すのでは明らかにできなかった思想を、本研究の神学的認識論の観点は明らかにしたのである。